

## 編集後記 From Editor



大阪・万博公園で  
定期的開催されている  
フリーマーケット

この十年ほどで最も変化したことと言えば、携帯電話が各世代に一気に普及したことだろう。電車の中でも、最近では子どもから年配の人までが男女を問わず、一心に小さな画面を見ながら指を動かしている。手の小さな端末で、誰もが外界とつながっている。逆に周囲の世間は意識の中にはないようだ。

私自身、初めて携帯電話を手にしたときに、どうだっただろうか。便利さに結構うきうきしていたように思う。ただし、その利便性にもすぐに慣れて、以前のこと、例えば公衆電話がどこにあるかを知っていたり、いつもの電話番号を空で言えたりしたことも、しばらくするとすっかり忘れてしまった。

学生の頃にテレビゲームが流行り、日本語ワープロ、そしてパーソナルコンピュータを使いこなすようになった。いま四〇〜五〇代の人々は、そうした進化を同時代的に体験してきた。さらに、携帯電話やメール、インターネットの普及にともなって、まさしく情報社会に身を置くようになった。

しかも、それは世界的に同時に進行した。グローバル化が進み、情報の行き来が地球を小さくした。でも、便利になって、今度は忙しくなった。金融・証券系など、世界の情勢変化を逐一追いかける人たちは、二四時間三六五日、心がやすまる暇がないのではないか。かつてIT化が進めば省資源になるし、時間的にも余裕のある勤務ができるようになると言われた。しかし現実はどうだろうか。未来の予測は、結果として逆方向になることも多々あるようだ。

それでも、人々は、先のことを展望し、期待や不安を感じながら、自分や周囲の人たちの幸せや人生の充実を願わずにいられない。

情報が進んでも、人々のコミュニケーション能力が以前より進歩しているとは言えない。一方、人間が生きていく上で、人と人との直接的なコミュニケーションは、どんな世の中になっても不要にはならないだろう。今号の論考で、高見澤氏はこう書いている。「…人は一人では生きられない。近隣とのつきあいがあるかどうか、家族や友人との交流はあるか、他者とのコミュニケーションの有無が生活の密度を左右することになる」。

今回の調査からも、多くの人が、日々の充実感がある暮らしを望んでいることが分かる。周囲の人たちとうまくつながりながら、個々人が暮らしの主体となる。それをどう具体化していくのが課題となるようだ。

—— 京 雅也

表紙写真 2020年は大阪万博の開催から数えると50年。現在の千里万博公園の芝生広場で遊ぶ家族連れ  
裏表紙写真 新旧のまちなみと暮らしが交錯する大阪・中崎町/市街化が進む大阪近郊での専業農家(高槻市)/高層ビルが次々に建設され様変わりする大阪・中之島付近

### CEL 86号 特集 ■ 2020年の生活像を考える

発行 ● 平成20年10月1日 頒価1,000円(送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所(CEL)  
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 多木秀雄 Hideo Taki

■編集人 京 雅也 Masaya Kyo/ 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集 ● 関西ビジネスインフォメーション(株) 内 CEL編集室  
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18  
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本 ● 日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CLURE, ENERGY AND LIFE © 2008 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ [ <http://www.osakagas.co.jp/cel/> ] でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで